

Title	<書評> Heinrich Kaulen, "Rettung und Destruktion : Untersuchungen zur Hermeneutik Walter Benjamins, Tübingen : Niemeyer, 1987
Author(s)	長澤, 麻子
Citation	年報人間科学. 1994, 15, p. 189-193
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8223
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Heinrich Kaulen

Rettung und Destruktion

Untersuchungen zur Hermeneutik Walter Benjamins

Tübingen : Niemeyer 1987

長澤 麻子

“Homme de lettres”とハンナ・アーレントに呼ばれたヴァルター・ベンヤミンは、詩的にも哲学的にもまた神学的にも思索しながら、世俗的な作品の翻訳、批評、そして解釈を書き続けた。けれども、そのような彼の仕事に通底する解釈学的な根本法則というのが体系的に示されることはなかった。このことも、ベンヤミンの解釈学的方法の一面を表しているといえるであろう。さて、ここで紹介するハインリッヒ・カウレンの『救済と破壊——ヴァルター・ベンヤミンの解釈学に関する研究』(Heinrich Kaulen, *Rettung und Destruktion, Untersuchungen zur Hermeneutik Walter Benjamins*, Tübingen : Niemeyer 1987)の試みは、表題が示すように、彼の仕事の一つのつながりをもって理解されること、すなわち構想を見いだすことによって、ベンヤミンの解釈学における根本法則を明らかにすることにある。もちろん、ベンヤミンの著作のなかで解釈の前提条件や原則に関連したテクストは少ないが、そのなかでも著者は『翻訳者の使命 (Die Aufgabe des Übersetzers, 1921)』、『ボードレールに関する「方法的断片 (Methodenfragment)」』、『歴史の概念について (Über den Begriff der Geschichte, 1940)』を中心に取り上げている。ベンヤミンの方法論的モチーフが、彼の初期から後期に至るまで一貫していることを示すためにも、幅広いベンヤミンの活動領域、すなわち彼の翻訳、批評、哲学を考慮する点でも、上述の三つが選ばれている。この三つの作品に関しては、ベンヤミンの書簡や他の著作の引用で補いつつ、詳細に解釈され、そこからベンヤミンの解釈学が推論されている。全体の構成は最初に挙げら

れた「メシア的言語補完」としての『翻訳者の使命』で明らかにしたものを後の二つの作品、「伝統の批判」である「方法的断片」および、カウレンの表現を借りれば、「歴史の構成」としての『歴史の概念について』で検証する、あるいは補強するというスタイルである。

著者カウレンによると、「翻訳はベンヤミンの思想の基礎概念でもあり収斂点でもある」という。おおざっぱにいうと、まだ存在していない真理を、主体の介入と再考によって諸現象から解き放す作業が翻訳なのである。つまり、ベンヤミンにとって翻訳は、個々のテクストを一般的な原則に従わせるのではなく、事柄の具体的な条件に応じて、常に繰り返し新たな解釈がなされ得るものなのである。

さて、ベンヤミンの議論の出発点は十八世紀後半、特にゲーテやヘルダーリンに遡る。というのも、十九世紀後半と彼の生きた時代では、翻訳の役目が内容を伝えることに終始し、原作の言語と形式が無視され、ほとんど無反省な感情移入の理論に基づいた翻訳が規範とされていたからである。著者に言わせれば、このような因習的な手段のために凝固した言葉を批判することによって、ベンヤミンは言語的連関にこだわらずにただ技術的道具的認識から翻訳を行う意識に打撃を与えようとしたのである。

ところで、まず著者は「形式の根本法則」が「トラクター」であることを示す。ここで、「ベンヤミンの場合、トラクターは中世のスコラ哲学に由来する」が、特に内容よりも形式において真理

について語る点特徴的であるという。すなわち、導入文の基本的思考が続く各文においても繰り返し返され、各文は因果的關係ではなく、共通点によってのみつながり、並列している。つまり、「トラクター」では、知の破壊的な形式として追従が拒まれ、固定された対立物が揺り動かされる」ため、体系的構成は根本的に断念される。その思考は常に相互交換的な媒介における弁証法となる。それゆえ、「解釈の思考の向かう方向は絶えずうろろし、それに応じて対象もさまざまな様相を展開するのである」。著者によれば、この形式が、ベンヤミンの思考全体に及んで行くという。

このトラクターの形式をもつ『翻訳者の使命』の中心的モチーフは、著者によれば「人間的主体性の神話的支配要求にたいする批判」である。つまり、墮罪以前に、アダム的な命名言語において統一されていた言葉と事物が、墮罪後、認識する主体性とそれによって把握されるゆえに支配され抑圧された具象性、という曖昧な二元論に変わった。この墮罪後生じた世界は、「自由で和解した人間の関係性に対して、墮罪の後の支配的な暴力の世界」、すなわち「抽象的媒介的概念の世界」であり、「普遍へ個別を従属させる」という認識の形態なのである。この結果、「異質な個別言語の多数性」が「認識の恣意的暴力の外的なしるし」となるのである。

このような認識のもとで、ベンヤミンは「原作と同じ内容を繰り返し返すことを期待する読者に対して、永遠に変わらないものを翻訳する」という伝統的な翻訳理論を鋭く批判する。ベンヤミンによれば翻訳は内容の媒体ではない。そうではなく、「原作では言語の潜在

的な部分が新たな言語領域として翻訳によって顕在化してくるのである。それゆえ、テキストの翻訳可能性は意味や表現ではなく、まず第一に原作の個別的な言語状態に依存している。さらに、作品は翻訳者の能力を通じて客観的に「補充」されること、つまり翻訳者によってより高い言語状態が求められているのである。確かに言語は道具的抽象的媒介として用いられるようになり、アダムの命名言語から個別言語に墮落していった。しかし、翻訳によって言語は他の言語によって補われ、その領域は拡大されていく。個別言語の中に隠された真の言語の破片が、純粹言語を目指してつなぎ合わせられていくのである。

著者の主張では、この言語運動において言語は自律的、すなわち意味を媒介するものという重荷から解放されているのである。そして、逐語性がこの言語運動を特徴づける。ベンヤミンの例によれば、ドイツ語の〈Brot〉とフランス語の〈pain〉は、日本語でいうところのパンという同一物であるが、「言い方」において異なったものを意味しているという。この抽象的に曖昧にされていた個々の言語差異、すなわち諸国語の「言い方」における差異に目をとめ、それぞれのニュアンスに沈潜していくこと、つまり逐語性は、意味の担い手からの「自由」に基づくのだという。このような原作の言語と翻訳言語の弁証法的な運動によって、新しい言語領域をもつ高次の言語が示されるのである。しかし、他方でその言語運動の自律性は、翻訳言語が原作の言語にとって「不整合で暴力的で異質なものになる」という暴力的契機も孕んでいる。著者の言葉でいうと、「それ

「暴力的契機」は翻訳の努力を、それが「純粹」言語のためには決して欠くことができないにもかかわらず、常に高次の契機を求めつつも、危険にさらすのである」。

この翻訳における危険とは、言語運動による領域の拡大の結果、その限界として突然現れる永遠の言語喪失である。しかも、限界を越えた領域に近づいていることは分かっているが、いつそれが現れるのかは分からない。それゆえ、言語運動としての翻訳は常に危険にさらされている。そこは、「近づきつつも常に避けなければならぬ沈黙の領域」すなわち、「神の記憶の領域」である。そこを指すことは、時間の相の下では常に暫定的で断片的でしかない。しかし、著者は、この未来のものにいたる過程がメシア的救済を暗示しているのだという。翻訳において、このメシア的救済あるいは解放のために翻訳者は因習的な言語規範を力づくで討ち破らなければならない。まさに、ここに、高次の状態を目指す救済と破壊の弁証法的関係を著者は見出す。そして、さらに、言語補充としての翻訳理論は、翻訳によって現存の秩序から出て、新たな可能性の世界への抜け道を示しているという点で現実批判でもある、というのが著者の言い分である。この現実批判の部分を発展させるために、ベンヤミンは翻訳理論における認識の概念を文芸批評や評論に持ち込むのである、という。

さて、ベンヤミンの「ボードレールに関する研究というコンテクストにおける方法論上の自己反省から生じた」方法的断片では、「後期ベンヤミンの弁証法的歴史記述の最も重要な試みのひとつ」

が見い出される。カウレンによると、ただ現実の歴史の運動から理解の歴史を際立たせるのではなく、「認識あるいは理解の歴史を社会の歴史的な生産関係や再生産関係から捉えなければならぬ」という。このような認識をベンヤミンは、伝統的な解釈学の普遍性の要求に対抗して示している。言い換えると、伝統的な解釈学は、一方では、主体の同一性を形成する協力のために意味を作り出したり、他方では、歴史的過程の了解において、現在の主体とその前史である過去との連続性を確証する。このような伝統的解釈学の規定に対して、ベンヤミンは伝統の批判的な撰取を行うのである。つまり、

この場合、事物と概念の差異の認識から異なる歴史的实践における両者の和解の要請を導き出すため、伝統の非連続性、すなわち個々のものの苦悩と抑圧が注目される。そして、著者の言葉を借りると、真の理解は、初期において示された「真なる生、完成された世界の状態、救済された言語の要請と結び付けられるのに対して、真理の理念は、ベンヤミンが最後まで『回想』のカテゴリーにおいてユダヤ的メシアニズムの果たされなかった可能性に固執していたとしても、「歴史の」構成の概念においてははや神学的には基礎づけられず、解放された革命的な実践の理念とともに考えられているのである」。ここで、カウレンは、ベンヤミンが歴史を構成するにあたって、神学よりも実践的な理念によって基礎づけている傾向を読みとっている。しかし、これはベンヤミンのユダヤ的メシアニズムの側面を否定しているのではない。そうではなく、黙示的な思考が、差し迫った終末に真の歴史の回復のための革命的視点と結び付けら

れることによって、実現されるべき自由の思考が、世界の救済と苦しんでいる個々のものの解放に向けられた神学的な「希望」として残されている、ということである。

こうしたベンヤミンの解釈学の第一の特徴は、カウレンによると、「伝統の危機という経験」から出発している点で他の解釈学と異なっているという。というのも、ベンヤミンのテキスト研究において「受け継がれた過去との解釈学的差異と伝統に対する断絶の意識」がその特徴であり、それゆえ「歴史的に歪められたコミュニケーションに直面して、いかにして本質的なものの真理契機を獲得するか」という問いが、解釈学に課せられた根本問題となるからである。そこで、「抑圧された個別的なものの苦悩の歴史である精神的な歴史」において、認識の主体は過去の償われていなかった契機に目を向けつつ、別の歴史の可能性を描こうとする。そして、この歴史の連続性のなかに抑圧され、忘れられていたものを想起しようとするのである。つまり、ベンヤミンの解釈学における理解とは、時代に制約されない真理を確かめるという機能ではなく、作品が生じ、受け継がれていく客観的な条件というコンテクストから作品を歴史的社会的に規定する機能であると著者はいつている。それだからこそ、主体が個々の現象における「些細なものに思いを凝らすこと」によって、抽象概念には欠けている隠された真理に出会うことができるのである。さらにベンヤミンの解釈学では、科学的な認識は実態やその歴史的な連関の認識のみならず、自身の社会的な立場や現在によって定められた経験のアクチュアルな課題にも基づいているという

意識も、解釈者に要求されている。このことから、まさに科学が内在的に研究されるべき実態と時代が要求するものと同じ様に考慮する点に、科学が客観主義的歴史主義の優位のもとで失っていた実践的正統性や弁証法的性質、そして社会的機能を、解釈学的実践が再び取り戻すという希望が生じる。こうして、著者の言葉でいえば、ベンヤミンは、以前の形而上学的神学的な「伝統、特に彼にとつてより近い立場にあるユダヤ的メシアニズムの伝統を解釈学的な理論の発展に新たに持ち込み、伝統の理解を日常的な歴史的経験の理論のために実り多いものにしようとすることによって、克服されないままに引き継がれてきた歴史主義の遺産や、伝統的な精神科学的解釈学的前提や志向と手を切ることができた」のである。

結局、カウレンによると、ベンヤミンの経験理論の中心は救済と破壊の弁証法的統一である。破壊ならびに救済は主体の自律的な働きを意味している。つまり、主体が誤った全体性の連続を意識的に破壊し、その全体性からふさわしい瞬間に個々の断片を引き出すことは、主体の自由を意味する。そして、この破壊的な力が断片的な個々のものの、とくに「経験」に向けられるとき、主体の自律性はユダヤ的メシアニズムをも越えた「救済」として示されるのである。こうして、「認識主体は現在のものとして自覚しつつ、伝統に対するその時代独自の利益と要求を実現する」のである。まさに、この弁証法的統一の目指すところが、ユートピア的地平だという。

このように、この著作は、ベンヤミン研究においてこれまででは

しば便宜的に分けられてきた言語哲学、方法論、歴史哲学という領域を解釈学という視点から再構成するというダイナミックな研究書である。また、分析によって、ベンヤミン独自の思想を抽出するだけでなく、それをベンヤミンの解釈学として理解することによって、アクチュアルな問題意識に結びつくものとして捉えなおされている。さらに、この著作自体もベンヤミンの定義したトラクタートのスタイルをとっていることや、救済と破壊の弁証法という中心的なモチーフをさまざまな角度から捉えなおしているところも興味深い。ただ、欲をいえば、救済と破壊が弁証法的に止揚される地平としての「経験」が越えていく「神学的」なもののニュアンスが明確にされていないことは、モティーフの核心に関わるだけに残念に思われる。しかし、文学的側面あるいは哲学的側面といった片寄りもなく、ベンヤミンの思想全体における彼の問題意識を見渡すことができる点でやはり好著といえよう。